

作曲のようにはいかない ベートーベンの肉料理

十二月の声を聞くと、わが国では各地でベートーベンの第九交響曲の演奏会が開かれる。その数は百回ではきかないだろう。

これは世界的にみるととても不思議な習慣だが、日本ではこの曲を聞かないと年を越せないというファンも数多い。一年間どんなにつらいことがあっても、あの第四楽章を聞けば、「来年こそは」との思いにさせられるというものだ。

我々は気楽に『第九』と呼んでいるが、実はこの曲にはとても長い題がついているので紹介しよう。

いわく「シラーの頌歌『歓喜に寄す』を終末合唱とし、大オーケストラ、四人の独唱者と四声の合唱のために作曲され、プロイセン国王フリードリヒ・ウィルヘルム三世陛下に、ルートヴィヒ・バン・ベートーベンによってもっとも深い畏敬のうちに献呈された交響曲。作品「二五」というもの。

あれだけの名曲を書いたベートーベンも、こと料理となると首をひねるような腕前だった

らしく、友人のイグナツ・フォン・ザイフリートは次のように述べている。

「皆さん待たされたあげくやっと料理がテーブルの上に並べられた。

ところがスープたるや慈善食堂で出されるもの
 といい勝負。牛肉は半分も火が通っておらず、野菜は脂肪と湯の中に浮かんでいた。客の方は手を出さないでいるのに彼は一人で平らげて、みんなにもすすめたものだ」

こうみると、天は二物を与えなかったのは確かに思える。味覚の方もあてにならない。これでは、せつかくの牛肉が泣くというものだ。

